

中国空軍が大気圏外ミサイル迎撃実験を推進

漢和防務評論 20180706(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

今年 2 月に中国は大気圏外弾道ミサイル迎撃実験を行ったことを公表しました。同実験は公表された分だけでも 4 回目なので、KDR は迎撃体が模擬弾道ミサイルに命中したのではないかと推測しています。中国軍の刊行物では弾道ミサイル防衛の重点地区は、北京、上海、三峡ダム地区とあるようですが、最近台湾が射程 2000KM の弾道ミサイルを開発中との報道があったため、中国軍は、特に三峡ダム地区の弾道ミサイル防衛に神経をとがらせているようです。

KDR モスクワ特電：

中国軍は、今年 2 月、ミッドコースのミサイル迎撃実験を行ったことを正式に発表した。これは、正式に発表した 4 回目の実験であった。この実験を段階的に見ると、KV 迎撃体の識別装置の実験に成功し、迎撃ミサイルが模擬弾道ミサイルに正確に命中した可能性がある。中国軍は、ひたすら HQ-19 型大気圏外迎撃ミサイルの開発を行ってきた。これは陸上配備ミサイルである。中国海軍 055 型ミサイル巡洋艦も類似の大気圏外迎撃ミサイルの搭載を準備している。ある説によると、HQ-26 と称するようである。(これは官側の正式な確認は得ていない)

一旦 055 が就役すると、海上配備型大気圏外迎撃ミサイルとなる可能性がある。これは、中国と米国の弾道ミサイル迎撃システムの構成が同じであることを示している。すなわち海上配備と陸上配備ミサイルを並行して整備し、大気圏内外で重層的に対処する方式である。

今回の実験は、台湾が射程 2000KM の弾道ミサイルを開発しようとしている、との台湾メディアの報道の直後に行われた。ここ数年来、中国軍内の刊行物は、何度も台湾、北朝鮮、インド、韓国の弾道ミサイル開発の脅威を記事にし、北京、三峡ダム、上海防衛の重要性を指摘した。現在中国は、ミサイル防衛システム建設の過渡期にあり、射程の長い HQ-9B を開発し、すでに外部にも展示している。HQ-9B の性能は、ロシアの S-400 に近く、主として航空機を対象とし、兼ねてミサイルにも対応する、と KDR は推測している。このほか KDR は、山東省及び黒竜江省に新時代の長距離大型フェーズド・アレイ・レーダーを発見した。このことから中国は、弾道ミサイル早期警戒システムの建設をすでに開始したと見られる。レーダーの位置から、主に米国及びロシアの弾道ミサイルの動きを把握しようとしているようだ。これは、戦略的な弾道ミサイル迎撃システムである。このほか山東省のレーダーは、北朝鮮及び台湾の弾道ミサイル開発の動向を重点的に監視している。コルラ（註：新疆ウイグル自治区）に配

備された弾道ミサイル迎撃レーダーはインドの弾道ミサイルを監視する。中国軍は、いわゆる”重点地区”に最初に 2 つの弾道ミサイル迎撃システムを建設する、と何度も表明している。1 つは、北京地区に建設する宇宙防衛作戦システムである。すなわち首都を中心に、宇宙防衛作戦を主とし、反撃作戦を従とする宇宙防衛システムである。このシステムは、ミサイル早期警戒レーダー、先進的な地对空ミサイル、高射砲、迎撃機等の防空戦力で構成され、国家の宇宙戦力と情報をやりとりする。

中国軍は、すでに北京地区に HQ-9A/B を配備した。今年から S-400 の配備が開始される。次の段階は、試験的に HQ-19 を配備する可能性が極めて高い。また軍内部では、台湾海峡を指名し、宇宙進攻作戦システムを建設する動きがある。すなわち予め作戦区域を設定し、作戦の需要に応じた、進攻作戦を主とし、防空作戦を従とする宇宙作戦システムの建設である。このシステムは、各種宇宙機器の支援の下、強大な偵察、監視、通信、航法支援能力を有し、爆撃機、攻撃機、戦闘機、早期警戒管制機、偵察機等の進攻作戦戦力及び戦区防空作戦部隊とロケット軍部隊とで聯合作戦を行う。中国ロケット軍は、福建省に多くの大型フェーズド・アレイ・レーダーによる早期警戒システムを建設した。現在空軍内部には、弾道ミサイル迎撃作戦司令部のような指揮組織は未だ建設されていない。したがって次の段階の軍事改革で建設されるのかどうか？すなわち、空軍司令部に、宇宙・航空一体化作戦を専門に指導する適度な規模の弾道ミサイル迎撃指導機構が建設されるのか？空軍の指導者、宇宙技術の専門家、通信技術の専門家、作戦部門の指導者、及び院校教育訓練の専門家で構成されるのか？

今年 2 月、台湾メディアは、戦時、三峡ダム施設に対する攻撃を話題にした。これは中国軍の神経の敏感な部分を刺激したようだ。中国軍は、内部で、米軍の B-2 爆撃機、及び台湾軍の三峡ダムに対する航空攻撃、弾道ミサイル攻撃の可能性を極めて重視している。

もし KDR の判断に誤りがなければ、三峡ダム地区は、北京に継いで、重要な弾道ミサイル対処、防空重点地区になるであろう。上述した”重点地区に最初に 2 つの対弾道ミサイル防御システムを建設する”とは、北京と三峡地区を指すのか、注目する必要がある。

最近、すでに三峡地区には防空、弾道ミサイル対処の動きが見られる。三峡、台湾地区防衛の重要任務は、いわゆる”強敵（米軍）の縦深空爆”に対抗することである。ここでは明らかに B-2 戦略爆撃機を対象にしている。中国軍は、「敵の早期警戒管制機の飛行コース及び各種電子設備の特性を把握し、我が軍は大出力の電子妨害機或いは分布式電子妨害設備を適切に配置し、敵の早期警戒管制機に対する妨害を積極的に行い、低空で侵入する敵航空機への指揮管制能力を低下させ、敵早期警戒機の探知距離 400 乃至 600KM を数 10KM まで低下させる」と述べている。

レーダー陣地の周囲 300 乃至 500M の位置に簡単な輻射源を設置し、反輻射ミサイル航法装置の正確な追尾を妨害する。敵の反輻射ミサイルの発射の意図を察知した場合は、風向及び地理的条件に従って、合理的に煙源を設置する。敵機と我がレーダー陣地との距離が 30 乃至 90KM の場合は、或いは投射照明器

材の散布を発見した場合は、同時に電源を切るか或いは迅速にレーダーのパラメーターを変更し、反輻射ミサイルの誘導を妨害する。来襲する敵機群或いは巡航ミサイルが我が防衛目標に接近した場合は、GPS システム妨害のための責任区分にしたがって、敵機搭載或いは敵ミサイル搭載の GPS 受信装置を妨害し、位置情報及び航法の精度を低下させる。

中国空軍は、通常編組上、3 乃至 4 個の警戒レーダーで 1 グループを編成し、1 つの主要な方向を担当させている。レーダーは、中高空レーダー、中低空レーダー、低空補完レーダーの混合編成である。隠蔽レーダー網：3 分の 1 の警戒レーダーは隠蔽レーダーである。基本的レーダー網の配置、配備だけでなく、厳密に偽装されているレーダー網が存在することに注意しなければならない。

機動レーダー網：機動性の高いレーダーで構成されている。中国空軍は、すでに北京、三峡地区に厳密なレーダー網、電子妨害網を配備した、と KDR は推測している。

以上